

# 陶器将軍



▲満留寿商会鳩杖盃 (個人蔵)



▲『陶器商報』満留寿商会広告 (多治見市図書館所蔵)

# 加藤助三郎

はじめに

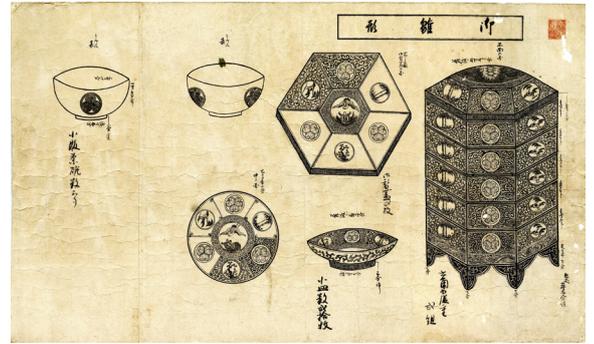
かとうすけさぶろう 加藤助三郎 (1857 ~ 1908) は明治時代に陶磁器販売店・まるす満留寿商会を営む傍ら、全国陶磁器相場を記載した新聞『とうきしょうほう陶器商報』を発行し、陶業界の情報革命を起こした人物です。また、明治政府の嘱託として清国を視察するなど、日本陶業界のリーダーの一人として知られています。助三郎はその活躍ぶりや批判に屈しない姿勢から「陶器将軍」と呼ばれました。

明治時代は日本が西欧諸国に肩をならべるために、急速な発展が求められた時代です。そのような中で助三郎は陶磁器産地の視察や講話、品評会審査に全国を飛び回り、日本陶業界全体に活力を与えました。本展覧会では明治時代を駆け抜けた陶業界の巨人・加藤助三郎の数々の業績を紹介します。

## 1、陶器商としての出発

加藤助三郎の父・助四郎は幕末に市之倉で製陶を営んでおり、嘉永4年（1851）には同志とともに京都村雲御所の御用焼を製造しました。同6年（1853）に江戸御薬園内陶器所に御用焼を納め、その後慶応元年（1865）には江戸城御本丸および小納戸へ焼き物を納めていました。助四郎の代から、製陶だけでなく「満留寿」の商号で販売業も始めています。

助四郎とあきの長男・助三郎は安政4年（1857）に市之倉で生まれました。元治元年（1864）より明治2年（1869）まで江戸で修学し、帰郷後再び上京して、同5年（1872）には東京深川で「美濃屋」という陶器商を始めました。その後同10年（1877）に郷土の同業者とともに「濃栄組」を東京日本橋に設立して、助三郎はその組長となりました。翌年に「濃栄社」と名を改め社長に就任しましたが、同22年（1889）には濃栄社の社長を辞任し独立して、東京京橋区南新堀に「満留寿商会」を開店しました。



↑江戸城御本丸御用品雛形（個人蔵）

## 2、満留寿商会

満留寿商会は明治22年（1889）に東京に事務所を開きました。本店は製造窯元の市之倉にあり、名古屋市坂上町（現名古屋市中区）に輸出陶磁器を主に扱う支店がありました（支店はのちに同市石町に移転）。開店当初の満留寿商会の取扱い商品は、美濃焼・尾張焼・伊万里・京都焼・九谷焼・会津焼・万古焼・淡路焼・信楽焼・相馬焼・明石焼などで、美濃焼をはじめとして全国窯元の商品を手広く販売していたことがわかっています。また、開店当初は関東・東北への内地向けの出荷が中心でした。（同25年（1892）の初荷帳より）

満留寿商会の主力商品は、助三郎の郷里・市之倉の特産の盃「の盃」で、御大典記念や日清戦争大勝記念、長寿祝など、様々な記念盃を売り出しました。また百個一組ですべて図柄の違う「百図盃」を考案し、見本品を一組3円で販売しています。

また、満留寿商会はいち早く輸出をはじめたことでも知られています。同22年にシンガポール、香港、広東、天津向けに2000個以上の陶磁器を、農商務省を通じて販売したことを始めとして、助三郎が監査役に就任していた神戸・神陶株式会社で南アフリカ・ケープタウンへ直輸を始めるなど、海外販路の拡充に力を注ぎました。



↑明治29年（1896）満留寿名古屋支店決算記念撮影（個人蔵）（前列右より3人目が助三郎）



↑満留寿商会製「平安遷都1100年紀念盃」満留寿のラベルが貼付されている（多治見工業高校所蔵）

満留寿商会の製品は博覧会や品評会で数々の賞を受賞しています。同28年（1895）の第四回内国勸業博覧会で有功2等賞を受賞、翌年の第1回五二會品評会では有功賞を受賞しました。同33年（1900）のパリ万国博覧会では銅賞を受賞し、同36年（1903）に大阪でおこなわれた第五回内国勸業博覧会で2等賞を受賞したほか、ハノイ大博覧会では金賞、アメリカ・セントルイス万国博覧会では銀賞を受賞するなど多くの賞を受けています。



明治25年の満留寿商会の初荷の売り先

### 3、陶業界初の新聞『陶器商報』



↑『陶器商報』第1号(明治27年1月発行)  
(多治見市図書館郷土資料室所蔵)

陶磁器の卸売での中間利潤が不当に高くされていることにより価格高騰を招き、販売を抑制していると考えた助三郎は、明治23年(1890)に「陶器毎月一月相場」を掲載した『陶器商便覧』を刊行しました。翌年には月刊『陶磁器相場報告』を創刊して全国の陶業者へ配布しましたが、これを阻止しようと妨害する同業者もありました。しかし助三郎は少しも屈せず、同27年(1894)1月より相場に加えて雑報や広告、全国の新聞から転載した陶磁器関連記事も掲載した『陶器商報』を刊行しました。このような様子から助三郎は「陶器将軍」と呼ばれました。発刊の願書には「従来我が国陶磁業に関する新報雑誌等のかつてこれなきを遺憾に存じ、(中略)内外陶磁器の沿革・古今の商状・工芸・進歩の比例等凡そ本業に関する内外の記事を輯載し、(中略)殖産興業・商運拡張の便を図り、海外貿易の途をひらき、国家交易の万一を稗補(助ける)せんと



↑出石陶磁器伝習所長・友田安清造富士絵花瓶(明治37年)  
陶器商報千歳の記念に全国の名工に製作依頼した尺花瓶。(個人蔵)

### 4、日本窯業界と助三郎

助三郎は明治24年(1891)に鉄道運送株式会社を設立し、従来の船積み輸送から日本で初めての陶磁器鉄道定期運送を実現しました。翌25年には東京陶器問屋組合の会頭に就任したほか、日本近代窯業の功績者ゴットフリード・ワグネルの教え子たちが設立した大日本窯業協会の役員を永く務め、明治の日本陶業界の中心に名を連ねてきました。また、全国各地へ赴いて共進会、品評会の審査員も勤めています。中でも農商務省次官であった前田正名が計画した品評会「五二会」(織物・陶磁器・金属器・製紙器・雑貨類の販売奨励を目的とした)では助三郎は創立委員として活躍し、岐阜・三重の五二会を新たに設立する活動も行っています。



↑満留寿製「五二会記念盃」満留寿のラベルが貼付してある(多治見工業高校所蔵)

### 清国視察

明治31年(1898)10月、助三郎は農商務省の囑託として商工業状況視察のため、約半年間清国へ渡航しました。この清国視察には農商務省参事官をはじめ11名の政府派遣者と、織物業、陶磁器業、蚕糸・製糸業、製茶業、煙草業などの全国の各産業界から19名が参加しており、助三郎は岐阜県庁からの推薦により同行することとなりました。当時京都陶磁器試験場長であった藤江永孝もその中の一人でした。助三郎は神戸港から出帆し、上海を拠点に漢口などの都市の商況を視察、景德鎮や宜興の窯業地で製陶の様子をつぶさに調査し、見本品を購入して翌年3月に多治見へ帰郷しました。途中暴風に遭って何日も船中に滞留したり、手続き遅延のため来た道に戻ったりと大変な渡航でしたが、この視察がのちの美濃陶磁器輸出の道を開くきっかけとなりました。



↑清国視察の際、香港にて撮影(明治32年2月)(個人蔵)  
(2列目左より3人目が助三郎)

## 5、多治見と助三郎

明治28年(1895)に満留寿商会は多治見町に本店を移し、東京と名古屋を支店としていましたが、同36年(1903)には東京支店を引き払い、助三郎は長年暮らした東京から多治見に拠点を移しました。

同31年5月に助三郎は岐阜県陶磁業組合長に就任し、土岐郡・可児郡・恵那郡の陶業者のリーダーとして活躍していきます。助三郎は窯業技術を支える人材育成の必要性を訴え、同年7月には岐阜県陶磁業組合の付属施設として岐阜県陶磁器講習所ぎふけんとうじきこうしゅうじょ(現多治見工業高校の前身)を開所しました。多治見工業高校には現在も助三郎が寄贈した陶磁器標本(参考品)が数多く残されています。その中には全国や海外の製品の他、明治元年から明治末までの年号が記された美濃焼参考品もあり、当時の美濃焼の年代指標ともなる貴重な資料です。

同41年(1908)2月に助三郎は長年の功績により緑綬褒章りよくじゆほうしょうを受章しました。しかし翌月の3月13日、持病の労咳ろうがいにより52歳の若さでこの世を去りました。各分野でめざましい活躍を続けた助三郎の死を悼み同45年(1912)平野公園ひらのこうえんに表功碑ひょうこうひが建てられ、現在も4月の陶祖祭で功績を讃える神事が行われています。



↑加藤助三郎の表功碑。題字は前田正名が揮毫し「千歳不朽」と書かれている。

### 寺社への献納

助三郎は陶業界へだけではなく、困窮者等の救済施設である養育院や慈善会への寄付など社会の各分野へ私財を投じた支援活動をしています。また、父・助四郎とともに寺社への献納が多かったことも知られています。市之倉しよめいじの永明寺をはじめとして新羅神社、平野町金刀比羅神社、永保寺、土岐市土岐津町中山神明宮、春日井市内津妙見寺、長野県善光寺やそのほかにも全国の寺社で灯籠などに助三郎の名をみることができます。また、若いころから一桂という名で尺八を吹奏しており、奈良の春日大社へ吹奏奉納した記録もみられます。

→ 虎溪山永保寺の陶製灯籠。多治見市有形文化財に指定されている。



← 尺八を手にする助三郎(明治29年)(個人蔵)

#### 【参考文献】

- ・「近代日本陶磁器業における業界新聞：『陶器商報』について」今給黎佳菜 2011(お茶の水女子大学 人間文化創成科学論叢 第13巻)
- ・「加藤助三郎家文書(1) 簿冊資料総合目録」多治見市図書館市史編さん室 2000
- ・「岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の近代陶磁器資料の調査研究」立花昭、佐野素子、手島敦 2011
- ・「明治の美濃陶業史」高木典利 1996

#### 【参考資料】

- 『陶器商報』加藤助三郎家文書(多治見市図書館所蔵)
- 『陶器商便覧』(明治23年)(横浜市立図書館所蔵)
- 『大日本窯業協会雑誌』(名古屋大学付属図書館所蔵)

謝辞

加藤光久 加藤良久 安藤不二彦 高木典利 立花昭 手島敦 村瀬博信  
内津妙見寺 岐阜県立多治見工業高校 岐阜県現代陶芸美術館  
多治見市図書館郷土資料室 多治見市美濃焼ミュージアム

#### 多治見市文化財保護センター企画展パンフレット 「陶器将軍 加藤助三郎」

- 展示期間・場所 平成30年2月26日(月)～8月24日(金)  
多治見市文化財保護センター展示室
- 発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター  
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26  
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033  
URL <http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>
- 発行部数 600部(印刷費用 17,820円)